

# 明代チベットのリゴンパ派の系統について

佐 藤 長

明朝の対チベット政策は大凡成祖の治世の初期、永楽十二、三年までの間に決定、施行された。その大綱はチベット各派の大ラマを八人選び、これらを法王、王に封じ、各々の勢力範囲における支配的地位を認証することであつた。その経過と八人の教主については別稿において扱うから、こゝでは詳しくは述べない。唯そのうち最も難解と思われる闡教王の系統についてだけ、従来の誤を払拭し、新たな見解を展開して諸賢の批判を請いたいと思う。

## 一

闡教王については明伝には、

闡教王者必力工瓦僧也。

とあり、必力工瓦 *pu lu k'u'u na* は定説のごとくリゴンパ *Hbri guñ pa* <sup>(1)</sup> そのものと考えて誤ない。今日リゴンパと呼ばれる土地は二箇所あり、第一はラサからキチュ河 *Skyid chu* を上つた、シヨロンチュ河 *Gsho ron chu* との合流点のリゴンジンサル *Hbri guñ rdson gsar* である。しかしこれは城塞であり、その地方の行政の中心になつていただけの地である (GHP. p. 111, fn. 115)。第二はそれより更にシヨロンチュ河を遡り、ティドム *Ti sgron* への分岐点にあるリゴン

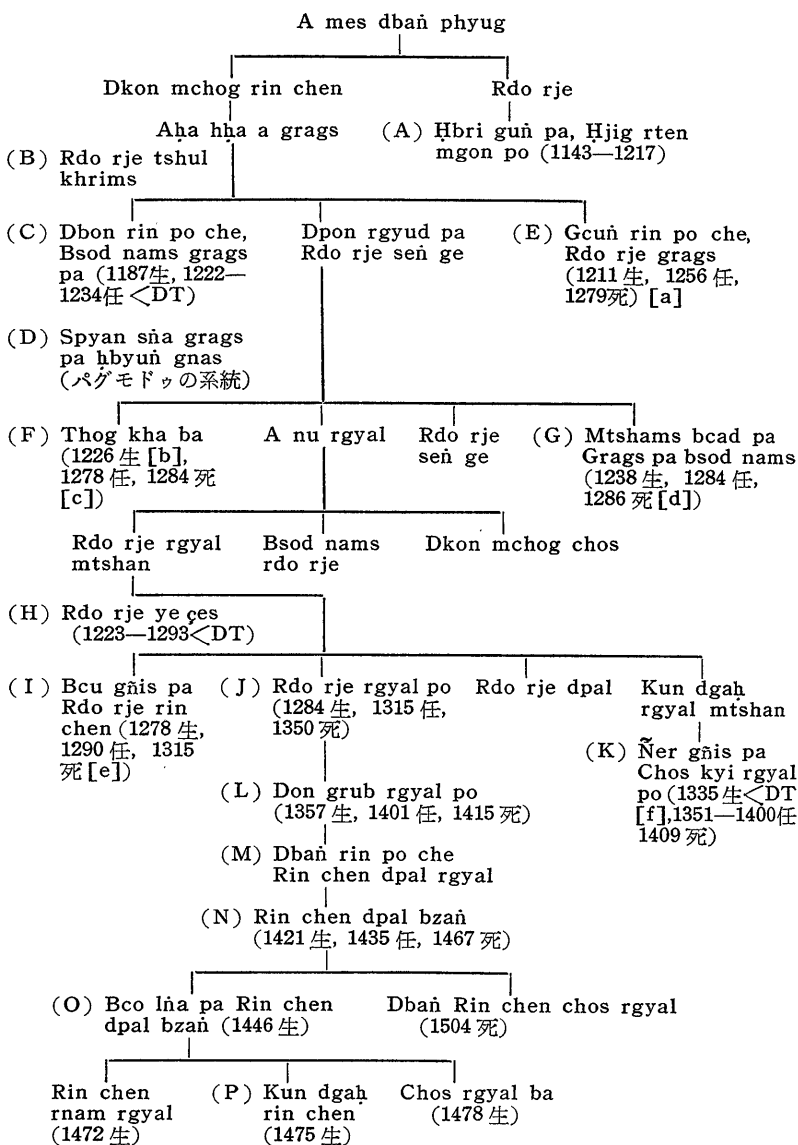
明代チベットのリゴンパ派の系統について 佐藤

ティル *Hbri guñ mthil* である。こゝがリゴンパの本山であり、伝統的な大寺院が存在しているのである (GHP. p. 111, fn. 116)。

リゴンパの開祖は普通バグモドッパ *Phag mo gru pa* の弟子リゴンパ (=リゴンチョルジェ *Hbri guñ chos rje* 一一四三—一一二七) と考えられているが、寺院そのものはその前に、同じバグモドッパの弟子であるミニャク・ゴムリン *Mi ñag Sgom rins* (一一一〇—一一七〇) によつて小規模なものが既に建てられていた (BA. p. 566)。リゴンチョルジェはその後一一七九年にこの地に来て建物を増築し、学問寺を開創したのである (DMS. p. 49a)。従つて宗派はカーギユパであり、この系統はリゴン・カーギユ *Hbri guñ bkah rgyud* と呼ばれるようになるのである。

リゴンの僧院長の初代以来の系譜を、年代を入れて一応整理した形で示すのはテブゴンである (BA. pp. 608—610)。しかしテブゴンは代々の僧院長の血統関係を示さないために、これに従う限り各々の人物は単に僧団の中から優れた人物が選ばれて次々と交代したとき印象を与えられる。一方ダライ仏教史を見ると、若干の人物が血縁を以てつながれることを示しているが、それは極く僅の人物であり、受ける印象はテブゴンの場合と同様である。ところが一方ケーパーガトンを見るとこの僧院の長は殆ど二つの系統、即ち開祖リゴンパの出身族であるキュラ氏 *Kyura* が独占的にそれを継承して行つてゐる (PT. p. 745, pp. 748—751)。トゥッチ氏はダライ仏教史等を材料としてリゴンパの系譜を作成したが (TPS. *Genealogical Tables*)、それは現在では全く役に立たないものとなつた。従つてここではケーパーガトンによつて論を進めなければならないが、この書の中には二箇所にその各代の継承と略歴が記されている (PT. p. 410, p. 747)。そこでより詳細な後の部分を整理して、新たな系図を作成し、それを基にして年代決定の問題を解決に導こう〔第一表〕。

〔第一表〕



〔系 図 註〕

[a] ケーペーガトンには「四十六歳にて坐牀せられたり」というが (PT. p. 749) テブゴンでは四十五歳、一二五五年に就任したことをいう (BA. p. 609)。しかしケーペーガトンには又 (PT. p. 748) 〃

「チュンリンボチュ」二十五歳のとき (一二三五年) オン「リンボチュ」逝かれたるが、彼は未だ成就を究竟せられざるにより、座主には学匠チュンガワ Smra baji sen ge Spyran sna ba (≡ラクパジュンネー Grags pa lhyun gnas) が任ぜられたりという。とあり、又 (ibid) 〃

「ラクパジュンネー」は「リゴンにおいて二十一年座主を勤められたり。

とあるから、二十一年目は一二五六年で、チュンリンボチュの四十六歳が正しい年齢となる。

[b] テブゴンでは丁亥の年即ち一二二七年であるが (BA. p. 609) ケーペーガトンに丙戌の年とあるにより一二二六年と見なす (PT. p. 749)。

[c] 「十七歳にて成就し、五十九歳にて逝く」とあるによつて、一二七八年任、一二八四年死と見なす (PT. p. 749)。

[d] テブゴンでは二四〇年生、二二八八年死。ケーペーガトンでは (PT. p. 749) 四十七歳甲申の年 (一二八四) に座主となられ、庚戌の年 lcags khyi に四十九歳にて逝かれたり。

とあるが、四十九歳の死を正しいものとすれば、甲申より二年後は丙戌 me khyi (一二八六) であつて庚戌は誤である。テブゴンではその死を鼠の年 byi lo にかけており、レーリッヒ G.N. Roerich はこれを一二八八年と見なしている (BA. p. 609)。しかし次代のチュニールパが八歳のときにツァムチェバが死したのであるから (PT. p. 750) 丙戌の年が正しく、テブゴンの鼠の年も亦誤である。

[e] その死については (PT. p. 750) 〃  
三十八歳戊寅の年に逝かれたり。

とあるが、三十八歳は乙卯の年、一二一五年に当る。次代のドルジュギェルポは一二八四年生で、三十二歳で座主となつてゐるから乙卯の年、一二一五年は動かさない。戊寅の年は誤である。

[f] マルボ史も同様辛卯の年 (一二三五一) の就任を言つてゐる (DMS. p. 58a)。

右の系譜のうち、Jドルジエギエルボまでは元以前に属し、漢文の対照史料は殆どないのであるが、Lドエンルブギエルボからは明伝、実録にその名が現れ、対照研究が可能となる。ところで忽ち突当る奇妙なことは漢文献の闡教王の各人の名がチベット文献とは頗る不一致な点が多いことである。その結果トゥッチ氏等は折角明伝の闡教王の条を英訳していながら、「明史に記録されている高職者の名はすべてチベット文献に発見することができなかつた。」と言い（TPS. p. 689, fn. 141）、その人名を唯忠実にチベット語に還元するだけに止めている（ibid.）。しかしマルボ史、ケーパーガトンを詳細に検討すると、人名の一致はともかくとして、かなりの程度に漢蔵両文献の比較研究が可能であり、一応の結論に到達することができるのである。次に順を追うて右の系図に書き入れた座主の年代を説明しよう。

## 二

第一にLドエンルブギエルボであるが、ケーパーガトンは（PT. p. 750）

法主ドエンルブギエルボはドルジエギエンツェンの御子として鳥の年に生れたまえり。夫人を迎えての御子はワンリンチエンベルギエルなり。三十五歳にて出家し、メンゴム・オエセルセンゲ Sman sgom Hod zer sen ge 等に師事したり。四十五歳にて座主となり、河を逆流せしめ、日月〔の運行〕を止める等成就しゅうしの徴を多く示したり。五十九歳辛未の年に逝かれぬ。

とある。このうちドルジエギエンツェンとあるのはドルジエギエルボの誤であつて問題とする必要はない。唯鳥の年が何年に当るかということであるが、それには先ず死去の辛未の年が何年であるかを定めなければならない。そこでその前の紀年を探すと、前代のチヨエギエルボが辛卯の年（一三五）に座主に就任しているが、この年についてマルボ史はゾエタン

寺院 *Rise than* 建立の年を壬辰（一三五二）にかけて（DMS. p. 58a）

この年はリゴンにおいてニエルギエーパ *Ner brgyad pa* ドルジェギエルポが逝きて、チヨエキギエルポ御年十七歳にて牀座に即きたる翌年なり。

といつて、全く一致している。重要なのはそのときチヨエキギエルポが十七歳であつたことである。ケーパーガトンでは、チヨエキは六十六歳で一切を棄て、七十三歳で歿したというから（PT. p. 750）、その六十六歳は一四〇〇年に當る。而して次代のドエンルブは右に示すごとく四十五歳で座主となつてゐるのであるから、その年は一四〇一年としなければならぬ。従つて享年五十九歳は当然一四一五年でなければならぬであらう。ケーパーガトンが別に示した座主の表でも、彼が十五年在職したことをいうが（PT. p. 411）、それはこの年次に完全に一致する。とすれば死去の辛未の年は乙未の年（永樂十三年）の誤でなければならぬ。同時にその生年を逆算すれば一三五七年丁酉の年となり、鳥の年という右の記載に先ず合致するのである。

チヨエキギエルポとドエンルブギエルポのこれらの在位年代については漢文史料の方からも正確に証明できることである。実録洪武二十四年正月己丑の条には（史料三七頁）

烏思藏必力工尚師輦卜車搦思吉結卜、遣使堅敦真、以所獲故元雲南行省銀印來獻。

とあるが、これがリゴンパの使者の明廷に初めて現れた記事である。興味あるのはその輦卜車 *lien pu ts'ie* Rin po che が搦思吉結卜 *\*suo si tqi tgie pu* Chos kyi rgyal po であることと、明かにチヨエキギエルポその人であり、洪武二十四年（一三九一）は正にその在位中に當るのである。

続いて実録永樂元年正月庚辰の条には、「必力工瓦等國師」の遣使來朝をいうが（史料四八頁）、これがチヨエキギエルポ

であるかドエンルブギェルポであるかは明かでない。しかし同四年二月丙寅に遣使入貢した「必力工瓦国師端竹監藏 *tu'en tgy' t'ien tsad*」(史料五一頁)は確に *Don grub rgyal mshan* で、ドエンルブギェルポその人である。<sup>(2)</sup> 永樂四年(一四〇六)は彼が座主に就任してから丁度六年目に当る。その意味では永樂元年(一四〇三)の「国師」はドエンルブであり、その遣使は一四〇一年の就任を報告するためのものであつたかも知れない。端竹監藏の名は同じく永樂七年(一九〇九)二月甲戌及び十一年(一四一三)二月戊午の条にも見え、これ亦彼の在位中のこととして年代上何等の矛盾はない。唯この場合ドエンルブギェルポと端竹監藏と何れの名が正しいかという問題が残るが、恐らく中国史料のドエンルブギェンツェンが正しく、チベット史料のドエンルブギェルポはその略された形であろう。パグモドゥのガーギワンチュ *Nag gi dban phyug* が殆どのチベット史料でガーギワンポ *Nag gi dban po* であつた例が参考となる。<sup>(3)</sup>

ところで右のごとく見てくると漢藏の文献は一致して年代の上では何等矛盾を残さないようであるが、問題はドエンルブの生年である。もし以上の計算が誤らないものとすれば、ドエンルブは一三五七年の生れで、父ドルジエギェルポが一三五〇年に歿して七年目の子となる。これでは到底両者の間に父子関係の設定は困難となろう。この問題は実に難解である。現在彼等二人を父子として規定しているのは、右のケーパーガトンの記載のみで、他は何等その血縁関係を明かにしていない。ケーパーガトンの記載を疑うことも可能であるが、寧ろそれよりはこの際ドルジエの兄弟には一妻多夫制が行われていたという想定でこの問題を考えてみたい。即ちドエンルブの生母はドルジエの死後他の兄弟——といつてもドルジエベル *Rdo rje dpal* かクンガーギェンツェン *Kun dga'i rgyal mshan* に限られる——に嫁して彼を生んだが、彼がチョエギェルポの後を継いで座主となつたため最も関係の近い座主ドルジエの子として後継者に決定されたのではないかということである。ドエンルブの時代にはチエンガの権威は高まり、その秘密教学は非常に盛大となつたとダライ仏教史は記しており

(TPS. p. 631)、その故に父を彼の実父の輩行のドルジエにかけたという作為が後に行われたのではなからうか。とにかく此処では右のような臆測でこの間をつなぐが、別の可能性ある考え方については他の稿でのべる。

第二はMワシリンボチェ Dbai rin po che であるが、彼の実名は、ケーパーガトンに (PT. p. 750)。

〔ドエンルブギエルボが〕夫人を迎えての子はワシリンチェンベルギエル Dbai rin chen dpal rgyal なり。

とあるにより、リンチェンベルギエル即ち Rin chen dpal gyi rgyal mtshan と考えられる。ワシリンボチェと称されるのは実録永樂十一年五月丙戌の条に (史料六三頁)。

必力工瓦端竹監藏為灌頂慧慈淨戒大國師……賜以誥印、封領占巴兒吉監藏、為必力工瓦闡教王……賜印誥綵幣。

とあるごとく、彼が闡教王に封ぜられたからである。ところで永樂十一年 (一四一三) というところ、未だドエンルブギエルボが在世していたときであり、その故に彼に右のような大國師の号が授けられたのであろう。<sup>(4)</sup>しかし同時にリンチェンベルギエルに王の封号が授けられたとすると、ドエンルブの座主在位中にリンチェンは闡教王となつたことになる。ケーパーガトンではリンチェンはワンの称号を授けられ、ゴンパ Sgom pa の在職中にナグソグ Nag sog (黒モンゴル) を討伐し、ドエンルブの死後座主になることを要望されたことが順次に記してある (PT. p. 751)。従つてやはり彼は父の在世中にワンの称号を取つたことは疑なく、その原因が何であるかは明かでないが、或は武功その他により、彼の実力が早くから示されたことによるのかも知れない。しかし彼はリゴンの座主の位には即かなかつた。ケーパーガトンは (PT. p. 751)。

法主 Chos rje (ドエンルブ) 逝きし後、座主にと請導されしが、

我のごとき問法少く、智慧の誠に負しきもの、

他人の道を導く力量はあらじ。



〔座主とならば〕我は惡趣に墮ち行きて、

万戸の民と子等は何をかなすべき。

と言いて聴かず。すべての人々力づくで〔彼を〕牀座に導きたれば、三日経て逃れ、シナの五台山に行きて、今そこに尚住せらると言わる。

といい、彼がドエンルブの死後間もなく中国に行つたごとく述べるが、その事實は確定できない。しかし一方実録永樂十二年正月己卯（史料六四頁）、同十四年五月辛丑（史料六六頁）、同十五年十二月甲辰（史料六七頁）、同十六年三月丁巳（史料六八頁）、同十七年十月癸未（史料六九頁）、同二十一年二月乙卯（史料七一頁）、宣德二年四月辛酉（史料八六頁）の各条にはともに闡教王としてのリンチェンの名が見える。従つて宣德二年（一四二七）頃までに、彼が座主ではなくても闡教王になつていたことはまちがいないであらう。ケーパーガトンに次代のリンチェンペルサンの出生について、「ワンリンボチェが政を摂りし *rgyal srid skyon* ときの子として辛丑の年（一四二二）に生れた」ことを言っているのによつても（PT. p. 751）、彼が父の死後實際に政權を担当したことは明かに承認されるのである。

### 三

第三にNリンチェンペルサンであるが、彼が生れたのは右に述べたごとく辛丑の年であるという。この年に先行する紀年はケーパーガトンではドエンルブギエルポの歿年辛未の年であるが、これが乙未の誤であることは前述した（六頁）。そこで乙未以後の辛丑は当然一四二一年（永樂十九年）である。彼は五歳のとき中国の使者「大人」*Tahi shih* 等に会い、威光の程を耀かしたというが（PT. p. 751）、彼が五歳のときは一四二五年（洪熙元年）である。実録永樂二十一年四月己巳

の条によれば、パグモドゥのラクパギエンツェンの使者が来朝帰国したときに、朝廷では中官戴興と一緒にパグモドゥに派遣している。従つて多分恐らくこの戴興が往復の途上リゴンで幼いリンチェンペルサンに面謁したのであらう。<sup>(5)</sup>

ケーパーガトンは、七歳のときに彼の父が中国に行き、同じ系統のものが他にいなくなつたことをいうが、七歳は一四二七年（宣徳二年）であり、事実上彼がワンリンボチェの後を襲つたのである。この年の四月には太監の侯頭がチベットに遣わされているが、訪問先の一つには闡教王のワンリンボチェが挙げられている（史料八六頁）。多分彼の帰国によつてワンリンボチェの死去は明廷に明かにされたのであらう。<sup>(6)</sup> 宣徳五年五月庚戌には「闡教王領占巴兒監藏之子緯兒加監巴領占」に襲爵の命が下つている（史料一〇七頁）。緯兒加 *ts'iau z'i tsa* は *chos rgyal* 領占 *lig tshen* は勿論 *rin chen* だ、監巴 (*byams pa*) は不明であるが、たとえ明かになつたところでこの名はリンチェンペルサンとは如何にも一致しないものである。この名については後程再び取上げてみよう。

ついでケーパーガトンは十五歳のときのこととして (PT. p. 751)'

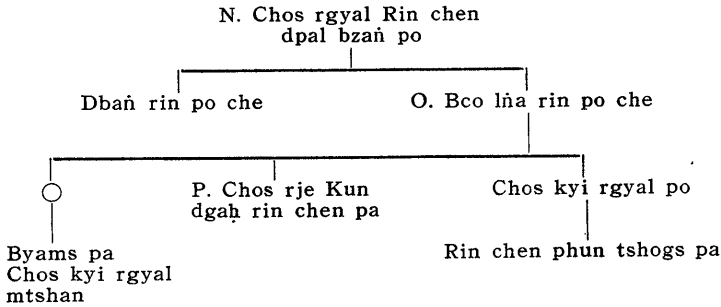
楼上の金堂に請導され、同血統のものなきにより出家せざるままに座主〔の職〕と俗政とをともに行えり。という。かくして一四三五年に彼は正式に座主として位に即いたのである。

彼の享年はケーパーガトンには六十七歳とある。これが正しいとすれば彼は一四八七年（成化二十三年）に世を去つたことになるであらう。しかしこの年齢と紀年が正しいかどうか、これも後程詳論しよう。

第四はケーパーガトンによれば父と同名のオリンチェンペルサンである。これから以後の系統についてはマルボ史でもその系譜がたどれるので (DMS. pp. 51a—52b) 次これを整理して掲げておく〔第二表〕。

この表によつてオリンチェンペルサンはマルボ史ではチョンガーリンボチェ *Bco lha rin po che* であることが分るが、

〔第 二 表〕



ダライ仏教史もこの人物をチョンガーリンボチェの名で呼んでいる (TPS. p. 631)。この王の在位年時については頗る複雑な問題がある。

先ず第一に彼の父Nリンチェンペルサンはケーペーガトンでは六十七歳で世を去つたというから (PT. p. 752) 一四八七年 (成化二十三年) の死ということになる。ところが中国文献にはこれに対応する闡教王交代の記事は成化二十三年前後には全くない。反つて実録成化五年正月辛巳の条に、闡化王、輔教王の新封とともに (史料二五三頁)、

闡教王領占叭兒結堅參男領占堅參叭兒藏卜……各襲其父封爵。<sup>五</sup>

とあつて、成化五年 (一四六九) より數年内に座主の交代があつたことを示すのである。勿論これに対応する記事は何等チベット側の文献では一四六九年前後にはない。而してケーペーガトンではOチョンガーリンボチェに関する年代はすべて十二支のみで記されており年代決定は頗る困難である。又彼の後を嗣いだPクンガーリンチェンについてはチベット側文献ではその名がすべて一致しているが、中国文献ではこの名は何処にも全く見出し得ない。

これらの矛盾と不明は我々の年代整理を甚しい混乱に陥れるが、やはりマルボ史とケーペーガトンを詳細に検討することによつて解決への道を歩一歩進めてみよう。方は両書によつてPクンガーリンチェンに関する年代を確定し、それより遡つて父王

のOチョンガーリンボチエ、更にNリンチェンベルサンの年代決定へと進んでゆくことである。

さてクンガーリンチェンに関する年代はマルボ史では丁亥の年に歿したことが記されているのみである(DMS. p. 52a)。この丁亥を何年に定めるかという問題は彼の後を嗣いだリンチェンプンツォグ Rin chen phun tshogs に関する年代の決定によつて定まる。ところでマルボ史はこの王の在位中のこととして、「この戊戌の年 sa khyi」ということを言っているが(ibid.)、それは著者がマルボ史を書いている現在をいつているものに外ならない。これに对照できるのは同書のパグモドゥの歴史を述べた部分の最後にガーキワンポの時代の辛丑の年にかけて(DMS. p. 70a)。

その辛丑の年から今日の戊戌の年までは五十八年経たり。

という一文である。辛丑の年は、パグモドゥの歴史に詳細な年代を入れてゆくと、一四八一年となり、その後の五十八年となると、問題の戊戌の年は一五三八年(嘉靖十七年)となる。従つてこの一五三八年がマルボ史の書かれた年代と見なされるわけである。そこでリンチェンプンツォグの在位中の戊戌もこの一五三八年に相違ないことになるが、その就任が「己丑」とあるのは(DMS. p. 52a)、当然一五二九年となる。同様に逆算してクンガーリンチェンの歿した丁亥の年は一五二七年<sup>(7)</sup>ということになる。

クンガーリンチェンの歿年はケーペーガトンにも丁亥の年と書き込まれており、それを手がりとしてケーペーガトンの諸紀年を決定することができるようになる。ところでこのクンガーは前述のごとく中国文献に全くその名を見ない。実録正徳十三年(一五一八)七月丙午の条には(史料三五八頁)。

遣大護国保安寺番僧覺義領占劉巴等、充正副使、率其徒二十七人、入烏思藏國、封其酋、為闡教王。

という文があり、領占劉巴 *ling tshien tsha pa* は Rin chen grags pa であろうが、肝心の闡教王の名が見えない。しかし

その年代がクンガーの歿年に頗る近いということから、これをその新闡教王の封爵に関する記事と見て差支えないであろう。即ちクンガーリンチェンは一五一八年以前の数年内に父に次いで座主に就任したのである。

#### 四

クンガーリンチェンの就任の時期を決定することができたから、問題は更に遡つてチョンガーリンボチェの紀年の検討といふことになる。中国文献では右の実録の正徳十三年の記事に先行する闡教王交代の記録は、先に引用した成化五年正月辛巳のそれである。このときに新に封ぜられたのは領占堅參叭兒蔵ト *liŋ tšiem tsien ts'äm \*pa zj tsat pu* であり。この名は *Rin chen rgyal mtshan dpal bzai po* と還元できる。これによりチョンガーの名がマルボ史やケーペーガトンで *Rin chen dpal bzai* と記されているのは実録、明伝のその略された形のものと考えなければならなくなる。

ところでこの際問題となるのは実録、明伝で彼の父と伝えられる「領占叭兒結堅參」である。チベット文献ではOチョンガーの父はNチョエギエル・リンチェンペルサンであり、それは漢文献では宣德五年に闡教王に封ぜられた綽兒加監巴領占であつた。とすると領占叭兒結堅參という人物はチベット文献では比定する対象がなく、宙に浮いて幽霊的存在となる。この解決については漢文史料を充分に検討してみなければならぬ。即ち領占叭兒結堅參の名は実録ではチョンガーの封爵に関する成化五年正月の条のみにしか現れず、それ以前の何処にも検出し得ない名なのである。従つて勿論この王が封爵を受けた時期についても何等手がかりはない。明伝には、

宣德五年王卒、命其子（N）綽兒加監巴領占嗣、久之卒、命其子領占叭兒結堅參嗣、成化四年……明年王卒、命其子（O）領占堅參叭兒蔵ト襲。

明代チベットのリゴンパ派の系統について 佐藤

とあつて、Nの死について「久しくして卒す」と曖昧なことを言い、領占叭児結堅參を次いで登場させている。それは実録の右の記事を抜いかね、他に対照する史料がないままに匆卒に二史料を接合させた跡が歴然たるものである。

思うにこの領占叭児結堅參 *liŋ tɕiem \*pa ʒi tɕi tsien ts'am* は *Rin chen dpal gyi rgyal mshan* で、Nリンチェンベルサンその人を指し、中国文献の緯児加監巴領占と同一人物であろう。同一人であればこそ特にその封爵に関する記事は何等中国文献には現れないのであろう。宣德五年の封爵の後は成化五年の封爵へと続くのが正しく、その間は確実に蘭教王は唯一人しか存在しなかつたのである。

そこで愈々ケーパーガトンのOリンチェンベルサン(ニチヨンガー)に関する紀年に進むが、同書では彼は三十九歳竜の年に歿したことになつてゐる(Pt. p. 753)。常識的にはこの年はPクンガーリンチェンの蘭教王に封ぜられた正徳十三年直前の竜の年、正徳三年(戊辰、一五〇八)と考えられるが、そうすると彼は少くとも成化五年(一四六九)から四十年の長きにわたつて座主に在職したことになる。しかしそれでは彼の享年を越える長さになり、到底四十年の在職は信ぜられないであらう。そこで実録成化二十二年正月戊辰の条を見ると次のとき記事がある(史料二九七頁)。

上命錦衣衛獄、逮究番僧鎖南班著児并通事人等、原齋勅書勘合、班著児者瞿曇寺灌頂大國師班著児藏卜之徒也、先奉命齋勅書勘合、付烏思藏蘭教王、偽為王印信番文復命、故命逮究、以聞。

鎖南班著児 *suo nam puan tɕio ʒi* は *Bsod nams dpal hbyor*、班卓児藏卜 *puan tɕau ʒi tsəŋ pu* は *Dpal hbyor bzañ po* であらう。勅書・勘合を以て蘭教王を訪れしめたのであるから、当然このとき王の交代、或はそれに類似する変動がリゴンパにあつたことを推測させる。とすればこの年の二三年前にチヨンガーは歿したのではないかとの疑が濃くなり、その歿年の竜の年は甲辰の年、成化二十年(一四八四)と考えざるを得ない。成化二十年に三十九歳であつたとすると、

彼の生年は一四四六年（正統十一年）であり、ケーパーガトンが (PT. p. 752) 、

二十二歳のとき御父（Nリンチェンペルサン）の逝かれし〔紀念の〕塔等広大に造りたまえり。

という二十二歳は成化三年（一四六七）となり、漢文史料にいう成化五年の賜封に完全に吻合するのである。

ここに初めて我々は先に提起したNリンチェンペルサンの歿年を一四六七年と確定できる。しかしそれでは彼の享年は生年一四二一年から計算して四十七歳となり、ケーパーガトンの六十七歳 *re bdun* は四十七歳 *she bdun* の誤と見なさなければならぬ。少くともこれを四十七歳の誤と見なさない限り、その後の座主の継承を漢文献と一致させて解くことはできなくなるのである。

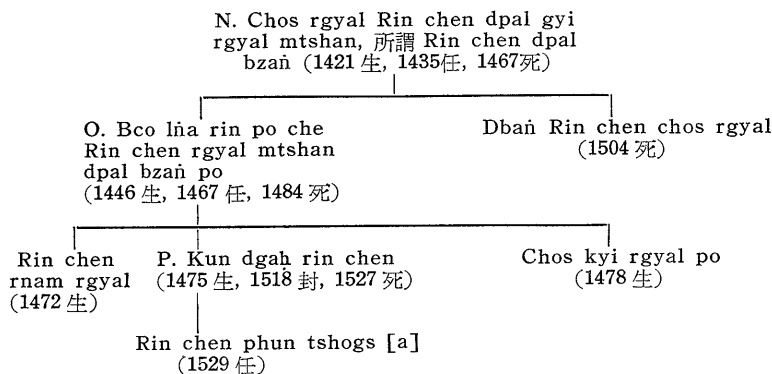
## 五

そこで残る問題は、第一に成化二十年以後正徳十三年までの間は一体何人が座主であつたかということである。この問題も頗る難解であるが、彼の兄弟ワンリンチェンチョエギエル *Dban rin chen chos rgyal* についてケーパーガトンは (PT. p. 753) 。

暫くの間ワンの職とゴンパ *Sgom pa* の荷を負いたまえり。

とあるから、恐らく彼がこの間の幾年かを支配の責任を負つていたのであろう。ワンリンチェンはケーパーガトンでは甲子の年に歿しており (PT. p. 753) 、前後の關係からこの年は弘治十七年（一五〇四）と考えられる。従つて彼の実権を握つていたのは一四八四年から一五〇四年までの若干年と限定されるであらう。尤もこのように考へても尚一五〇四年より一五一八年（正徳十三年）までの十四年の間は何人がリゴンパの教政を摂つていたかという問題は残る。しかし今はこれについ

〔第 三 表〕



ては何等利用すべき史料がないのを遺憾とする。

残る第二の問題はケーパーガトンにチョンガーの三子について生年が記されているが、それが何年に当るかということである。即ちチョンガーが二十二歳のときに父を失った後のこととして (Pt. p. 752) 、

後に血統〔保持〕のために、戒を棄てることによりて、ガル氏リンチェン  
 ペルモ Hgar bzah Rin chen dpal mo を娶り、竜の年にリンチェンナ  
 ムギェル Rin chen rnam rgyal 未の年に尊者クンガーリンチェン、犬  
 の年にチョエギェルワ Chos rgyal ba 等生れたまえり。

とあるが、「後に血統保持のため」というから二十二歳以後の晩婚であつたことはまちがいない。当然二十二歳即ち一四六七年以後、その歿年までにこれらの年を配当し、竜の年は壬辰（一四七二）、未の年は乙未（一四七五）、犬の年は戊戌（一四七八）と見なすことができるのである。

これによつて P クンガーリンチェンは一四七五年に生れ、一五一八年（正徳十三年）四十四歳で闡教王に封ぜられ、一五二七年五十三歳で歿したことが決定できる。右の考察の結果をまとめれば、N 以後の確実な系譜と年代は上のごとくなる〔第三表〕。

〔系 図 註〕



〔第五表〕

Hbri guñ pa
Gtsañ shig
I. Nañ rgyal ba
II. Gsal rje ba
III. Mkhas grub rin chen rgyal mtshan
IV.
V.
VI.
VII. Chos rgyal rin chen
VIII. Rin chen blo gros
IX. Rin chen dpal bzan

〔第四表〕

j. Rdo rje rgyal po
k. Chos kyi rgyal po
l. Druñ bces gñen pa
m. Dbañ ba
n. Chos rje druñ chen

[a] グライ仏教史ではペン・リンチェンツォグ Dpon Rin chen phun tshogs はクンガーリンチェンがブルン氏 Spu lun bzah と  
婚して生んだ子とされるが (TPS. p. 63) マルボ史では彼はチョエキギェルボ Chos kyi rgyal po の子とされ (DMS. p. 71b) 又  
クンガーリンチェンの項には「甥のリンチェンツォグバ」と出てくる (ibid.)。何れが正しいか明かでないが、一応クンガー  
子と見なす。

リゴンパの座主の系譜と在職年代決定に関しては以上で一応作業は終つたが、最後はテブゴン  
に記される J ドルジエギェルボ以後の座主の継承について (BA. p. 610) 付加しておく (〔第四  
表〕)。

j || J、k || K は問題がない。しかしその後の三人は全く右の系図と一致しない。しかしつら  
つら考えてみるに、これらは皆テブゴンの著者と同時代であり、その故か l—n には各々極めて  
俗称的な感を与えられる。特に m は M ワンリンボチェの俗称としては最もあり得る形である。

よつて l || L ドエンルブギェルボ、m || M ワンリンボチェ、n || N リ  
ンチェンベルサンと考えてよいのではないか。尤もそうするとテブゴ  
ンが書き上げられたのは一四七八年であるから、それは当然 O チョ  
ンガーリンボチェの時代となる。テブゴンの他の諸例からしてもその著  
者 ションヌツベルが現在の座主を記さない筈はない。ところがテブゴ  
ンはニエル Gñal のガンギェル Nañ rgyal の僧院長について次の  
系譜を与え〔第五表〕、「現在にはリンチェンベルサンである」ことを言

つてゐる (BA. p. 608)。即ち一四七八年頃のガンギェルの僧院長はリンチェンベルサンであることになるが、その時期は座主の系統では確に O チョンガーの治世である。而してチョンガーの名はリンチェンベルサンであるから、チョンガーは恐らくガンギェルの僧院長も兼任したのであらう。本来ならばテブゴンは n チョエジェルンチェンの次にリンチェンベルサンを書くべきであるが、それをガンギェルの方の系譜に書き込んだために、n チョエジェの後は書き込まないでしまつたのであらう。テブゴンが l—n に限つて何故俗称的な名を残したか、又現在のチョンガーの本名を何故ガンギェルの僧院長の方に残したか等の原因は必ずしも正確に明かにすることはできない。今は唯些かの推測だけを述べてこの稿を終りたいと思ふ。

(京都大学文学部助教授)

# 註

- (1) ロックヒルは衛藏図識の續訳の中で、必力工瓦をレボン Hbras spuṅs とはなないかと疑つてゐるが (Rockhill, W. W., Tibet, a geographical, ethnographical, and historical Sketch, derived from Chinese Sources, JRAS. XXIII, 1891, p. 199) 信ずるに足りない。トウッチ氏 G. Tucci がリンンに比定したのが当つてゐる (TPS. p. 689, fn. 141)。リンンはテブゴンでは Hhri khun、バクサムでは Hhri gon と綴られる。トウッチ氏は Hhri gon は誤であるところ (TPS. p. 688, fn. 125)。
- (2) 実録永楽四年三月壬辰の条には、「必力工瓦国師大板的達律師鎖南蔵ト」に成祖が綵幣衣服等を優賜したことが見える
- (史料五一頁)。大板的達 ta puan ti ta は Pan chen (= paṇḍita chen po, mahāpaṇḍita) 律師は Hḥul ḥdsin(pa) 鎖南蔵ト suo nam tszṅ pu は Bod nams bzai po の音訳とみて誤ないが、チベット文献にこの名を探し出すことは不可能であつた。
- (3) 「明代チベットの八大教主について(中)」東洋史研究二十卷二号掲載予定。
- (4) ャルボ史には (DMS. p. 50a) 法主ドエンルブギェルボワ Chos rje Don grub rgyal po ba のときに、天子燕王 Gon ma Ye dḥan (＝成祖) は国師の勅許を与えたれば、〔彼は〕国師リンボチェ Go rḥi rin po che と称せらる。

であるが、これに対応する。

- (5) *Taḥi shin* は戴興 *taḥ gñ* に音が一致するが、テキストでは *Taḥi shin chen po* とあり、固有名詞とは考えられない。スタイン氏 R. A. Stein は他の例から *Taḥi shin* を「大人」の音訳ではなからと疑っているが (Stein, Rolf A., *Recherches sur l'épopée et le barde au Tibet*, Paris, 1959, p. 213) 一応氏の考えに従っておきたい。

- (6) 実録宣徳五年正月甲子の条に「必力工瓦等処刺麻高僧南哥監藏」が来朝貢馬したことをいう(史料一〇四頁)。これが恐らく王の交代を知らせた正式の使者であつたのかも知れない。南哥監藏 *nam ko tāien tszy* は *nam ko* まぎ *nam* *mkhan* *rgyal mtschan* である。

- (7) マルボ史によればクンガーリンチェンの時代にシャマルパ *Shwa dmar pa* とシャセルパ *Shwa gser pa* (＝ゲルクパ) の戦闘が丙戌の年に行われたというが、これはその歿年の前年に当り一五二六年と算定できる。

- (8) 佐藤長「古代チベット史研究」上巻、京都、昭和三十三年、九頁

#### 〔略語表〕

明伝＝明史卷三三二西域伝三(通称烏斯藏伝)

実録＝明実録

史料＝明代西藏史料(明代滿蒙史料蒙古篇十所収)

グライ仏教史＝*Nag dban blo bzai rgya mtsho*, *Rdsogs*

明代チベットのリゴンパ派の系統について 佐藤

*Idan gshon nu dgah ston*.

*Taḥ gñ*＝*Gshon nu dpal*, *Deb gter snon po*.

マルボ史＝*Bsod nams grags pa*, *Deb ther dmar po gsar ma*.

ケーヴェーガトン＝*Dpaḥ bo gtsug lag hphren ba*, *Mkhas paḥi dgah ston*, edited by Lokesh Chandra, New Delhi, Pt. I, 1959, Pt. II, III, 1961.

GHP＝Alfonsa Ferrari, *Mk'yen brtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet*, Rome, 1958.

BA＝George N. Roerich, *The Blue Annals*, Pt. II, 1958.  
TPS＝Giuseppe Tucci, *Tibetan Painted Scrolls*, Rome, 1949.

DMS＝マルボ史

PT＝ケーヴェーガトン DT＝チベゴン

#### 〔付記〕

本稿に極めて重要なチベット文献若干を利用し得たのは稲葉正就・金子良太・高崎正芳の諸氏の厚情に基くところが多い。記して深甚の謝意を表するものである。又ケーヴェーガトンの難解の個所についてはゴル寺院タルツェ院活仏ソエナムギャムツ<sup>\*</sup>師 *Nor Thar rtse rin po che* *Bsod nams rgya mtsho* から懇切丁寧な教示を与えられた。同様に心からの御礼を申し上げたい。尚筆者は昭和三十六年十月から三十七年九月まで、日本學術振興会の配慮により、流動研究員として東洋文庫で協同研究に従事するを得た。本稿はその際の研究の一部であることを御断りしておきたい。